

岩城準太郎『明治文学史』：日本近代文学
史叙述の研究

吉田, 栄治

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

42

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1959-11-16

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018991>

岩城準太郎『明治文学史』

吉田 栄 治

岩城準太郎の『明治文学史』は、明治三十六年、井上哲次郎、芳賀矢一らが明治歴史全集の編纂を企画したさい、芳賀矢一の委嘱を受けて執筆されたもので、翌三十七年に稿をおこし、二年後の三十九年十一月に明治歴史全集第一篇として刊行された。さらに明治四十二年六月、初版の全体に訂正がくわえられ、とくに第七章「最近文学の概観」は改作され、あらたに二章を書きくわえ明治文学年表をつけた『増補明治文学史』が刊行された。¹

初版と増補版とのあいだには約三カ年の年月がさしはさまれている。この三カ年はちょうど自然主義文学運動が擡頭してきた時期にあたっている。したがって『明治文学史』の初版と増補版との内容上の相違は、後者においては自然主義文学運動が文学史叙述の対象として取扱われており、前者ではほとんどわずかしか触れられていないということがまず第一にあげられる。岩城準太郎が明治三十九年に刊行した初版を四十二年に増補改訂をくわえ面目を一新し改め

て刊行した意図が、新興文学としての旗幟を鮮明にかかげて出現してきた自然主義文学運動に着目し、それを「文学一転の兆」と見てその文学運動の由来を明らかにし、さらに明治三十年代末から四十年にいたる文学動向の質的变化、内容的發展をさぐるうとしたところにあつたことはいうまでもない。また、それによって『明治文学史』の日本近代文学叙述としての内容はより充実したものとなつたのである。

このほか初版と増補版とのあいだには、部分的に重複した叙述を削除したり、若干の字句の訂正をした程度の相違がみられるが、内容上でのいちじるしい変化はないといつてもいいであろう。

この『明治文学史』が書かれる以前にまとめられた近代文学史（当時においては明治文学史）叙述として大和田建樹の『明治文学史』を嚆矢としてつぎのようなものをあげることができる。

明治文学史 大和田建樹 明治二十七年

明治の小説² 高山樗牛 明治三十年

時代文学史 高橋淡水 明治三十九年

明治文学史 岩城準太郎 明治三十九年

明治文学³ 芳賀矢一 明治四十二年

増補明治文学史 岩城準太郎 明治四十二年

岩城準太郎の『明治文学史』の日本近代文学史叙述における文学史的位づけや評価を明らかにするにさいし、まずそのいと口としてその周辺の近代文学史叙述についての簡単な紹介をしておきたい。

大和田建樹の『明治文学史』は日本近代文学史の叙述としてもっとも早いものである。⁴ 大和田建樹は鉄道唱歌の作詩者として、また

歌人、美文家、新体詩人として明治十年代から二十年代にかけて活躍した文学者である。この『明治文学史』の内容は、明治初年より二十四、五年ごろまでをあつかっており、第一期所謂輸入時代、第二期所謂反動時代、第三期所謂新聞時代という時代区分をし、福沢諭吉、中村敬宇（正直）らの業績、翻訳書の流行、新聞雑誌の刊行を述べ、ついで小説、戯曲、脚本、新体詩、唱歌、新聞雑誌などの各分野で活躍した人物についての簡単な紹介をおこなっている程度のものである。

これに比べて高橋淡水の『時代文学史』は明治初年より三十八年までの明治文学を各ジャンル別にかけて（文学史をジャンル別に叙述するのは当時の常套的な方法であった）かなり詳細に描いており、一応明治文学についての総括的な展望を可能にしている。しかしこれはもともと中等学校の国語副読本として書かれたもので硯友社文学やその元禄文学の研究を「軽佻なる作家をして西鶴思想に心酔せしめ名を写実にかり実感を描写して劣情に訴え為に青春の子女をして誤らしめたるもの尠しとせず」といって攻撃しているところなどにこの文学史の性格が端的にあらわれているといえるだろう。だが部分的にはすぐれた面がないわけではなく、たとえば国民新聞における松原岩五郎の下層社会の内状をさぐるルポルタージュ活動の紹介や、児玉花外を「労働者にたいして満腔の同情を傾注せる」社会主義詩人として評価している点などはこの文学史の特色である。ついでにいえば、児玉花外を社会主義詩人として文学史的に評価したのはこの『時代文学史』が最初である。

大和田建樹の『明治文学史』高橋淡水の『時代文学史』は、いずれも日本近代文学の文学史的研究として一応その先駆的な意義を認

められてもよいものであるが、しかしそこには近代文学史叙述としての歴史的視野や問題把握や評価や叙述の方法やにおいて不十分な点や欠陥がすくなくない。それらは明治文学についての資料的な文献的なあるいは伝記的なそれぞれの領域における調査や研究の点で不完全なところがあり、また個々の作家や作品についての評価もきわめて幼稚であって、明治文学史叙述としてそれ程すぐれた達成を示しているとはいえない。こうした状態をはじめてこえ、一応の水準にたっした日本近代文学叙述としてあらわれたのが岩城準太郎の『明治文学史』であった。事実の探究とその記述をもって文学史叙述とする実証主義的立場にたっした包括的な明治文学史叙述の一応の完成が、この明治文学史においてはじめてなされたということは意義のあることである。

（註一）初版では明治初年より三十八年までしかあつかわれていなかったが、増補版では第七章が「文学一轉の機」と改められ、さらに「第四期の文学（明治三十八年—同四十一年）」として第八章「新興文学の由来」第九章「新興の文学」の二章が書きくわえられた。

（註二）『明治の小説』については別にあつかうことになっているのでここでは触れなかった。

（註三）芳賀矢一の『明治文学』は大隈重信選『開国五十年史』下巻におさめられているが、その内容は西洋文学が明治文学に及ぼした影響という観点から概括的に叙述したものでとくにとりたてていうことはない。

（註四）大和田建樹の『明治文学史』の以前に北村透谷の『明治文学管見』（明治二十六年）があり、注目すべきものだが別の機会

にゆずることにした。

二

岩城準太郎はいわゆる国文学——明治二十年代から三十年代にかけての国粹主義、国家主義思想の昂揚のなかで、その思潮をきわめて素直に自然に受入れた芳賀矢一が、明治三十年代にドイツに留学したさいに、アウグスト・ベックのドイツ文献学を学んで、そこに日本の江戸時代以来の国学との類似を発見し、この国文学とドイツ文献学とを結びつけ、そこに「日本文献学」という新しい学問研究の骨組みをつくり出したところが始まった——の主流と考えられている日本文献学の系統を引く国文学者である。したがってこの『明治文学史』は、芳賀矢一、藤岡作太郎直系の弟子にあたる岩城準太郎が文献学的国文学の方法を明治文学に適用して書いたものである。だから『明治文学史』の日本近代文学史叙述としての価値を批判的に追及するばあい、日本文献学のなりたちおよびその基本的な性格の解明と関連づけて考えてゆくことも適切で効果的な方法であると思う。

芳賀矢一がドイツ留学にさいして学んできたドイツ文献学のなかには、いふまでもなく、古典文化の追及や批判を通じて、一箇の明確な理想的な人間像を把握しようとする強烈な人間主義の欲求とでもいふべきものがあつた。それ故に、そのさまざまな領域にわたる研究は、たんなる素材的追及にとどまらず、そこではそれらの資料への批判とあわせて、作者の創造過程を主体的に追体験してゆく作業が重視されていたのである。たしかにドイツ文献学は、学問研究の対象を文献にかぎり、その文献の研究を通じて古典文化の包括的な展望を可能にし、完全な像をつくりあげようとした点において、国

学と類似していたといえるのであるが、その本質には一貫して近代的な人間主義がらぬいたのである。日本文献学にこうしたドイツ文献学の重要な学問研究の意義がまったくうけつがれなかつたわけではないが、むしろ本質的な点では芳賀矢一によって代表されているごとく近代的な人間主義とはかけはなれた、国家の発展をそのまま自己の運命と結びつける国粹主義、封建的な伝統国学の精神が支配的であつたことは否定しがたい事実であつた。ドイツ文献学と、伝統的な国学をきわめて安易に結びあわせた日本文献学の創始者たちの精神は、たとえば漱石がイギリス留学のさなかで東洋的な文学観と西洋的な文学観との対立に苦悩して、極度の神経衰弱にかかつたというような烈しい精神的危機に見舞われた事実と比してあまりにもへだたつた近代前的なものであつた。このような精神的危機に襲われることなく、ドイツ文献学の移入をやすやすとなしえて成立した日本文献学が、本質的に国粹主義的思想から脱却してない反動的なものであつたことはいふまでもない。近代的な人間主義とはむしろ逆の反動的国学の伝統をそのまま根底とした日本文献学が、やがて日本の現実から切離され、急速に現実への適応性を失つて官学的特権のかげにかくれ、排他的、独善的な権威主義へと墮落していったのは理の当然であつたと思われる。しかしこのような反動的な日本文献学ではあつたが、そこにドイツ文献学の近代的な合理主義的な思考や方法の側面がうけつがれなかつたわけではない。本質的には国粹主義思想にささえられていながらも——その当初において日本文献学の創始者たちは日本の現実のなかでその思想的な支えを有しており、また普遍的な国民性に立脚していることを確信していた——日本文献学はそうした反動的な国民性の一面とあわせ

てその研究方法や思考態度のなかに近代的な合理的な側面をもっていたのである。つまりそこには、伝統的な国学につらなる国民性と、近代的な合理性とが並存していたといえるのである。この日本文献学の国民性と近代性との奇妙な矛盾した二重構造はいつてみれば日本の近代化の特殊性と深く結びついているのであって、それ自体興味のある問題ではあるが、しかしここではそれを論じるのが目的ではない。いいたことは、日本文献学のこの国民性と近代性との不幸な分裂、近代前的な反動性と、近代的な合理性との矛盾が、岩城準太郎の『明治文学史』においてきわめて微妙なかたちでかさなりあっているということである。

一般的にいつて日本文献学における文学史研究の占める位置は大きい。日本文献学の文学史研究の方法はおおよそつぎのようにまとめることができる。⁵⁾

テキスト・クリティック

作者の伝記的研究

前代文学の継承および外国文学の影響

オリジナリティ（独創性）

読者層の調査

これは一言でいえば、事実の探究とその記述をもって文学史叙述とする態度といえるだろう。岩城準太郎が『明治文学史』を叙述するにあたって取った方法が右のようなものであったことはいうまでもない。むしろ、文学史叙述にあたって資料的、文献的、伝記的な調査研究は不可欠な基礎的な仕事である。文献、資料の蒐集、調査整理という基礎的な作業なくして文学史研究は不可能である。この『明治文学史』は、前出の大和田建樹の『明治文学史』、高橋淡水

の『時代文学史』などに比してこうした基礎的な作業を十分にふまえた文学史叙述となっている。それだけ歴史的視野もひろく、深みもましているといっている。当時の文学史叙述がおおむねジャンル別の叙述の方式を取っていたのを、各ジャンル相互を関連づけ年代順に各ジャンルの発展推移をとらえてゆくという合理的な叙述の方法を用いている点も『明治文学史』の特色の一つである。

その明治文学の時代区分はつぎのようになされている。

第一期（明治元年—同十九年）

第二期（明治二十年—同二十七年）

第三期（明治二十八年—同三十七年）

第四期（明治三十八年—同四十一年）

明治文学についてのこの時代区分はその後の近代文学史叙述にもうけつがれているように、妥当な合理的な時代区分であるといえると思う。この時代区分にしたがって、その期の時代思潮を概観し、小説、詩、短歌俳句、戯曲脚本、演劇などの各ジャンルについてそれぞれの発展変化を追及し、そのなかで個々の作家やグループおよび作品について具体的に評価してゆくというのが『明治文学史』の叙述の形態である。そしてその叙述は、明治文学に関する資料的、文献的、伝記的という個々の領域の調査研究の積みかさねをふまえ、それら個々の領域での諸研究の達成の当時における最新の概括を示すと同時に、全体的にもきわめて合理的で手ぎわのいい叙述となっているといえる。明治文学を總体的に包括し、あらゆる文学現象を詳細に網羅し、それに秩序と統一を与え、一応全体の展望を可能ならしめた合理的な近代文学史叙述としてこの『明治文学史』は、その最初にあらわれたもっともすぐれた近代文学史叙述と

いえると思う。

むろん『明治文学史』にはその後の文献的、資料的な個々の領域、さまざまな方向での諸調査諸研究の達成によって訂正されたり補われた点が少なくないが、当時における個々の領域での研究のつまかさねをふまえた日本近代文学史叙述のすぐれた試みとして、また日本文献学の日本近代文学の文学史研究における一つの成果として評価されるべきであろう。このことから直ちに『明治文学史』が書かれた当時においては、日本文献学が現実への適応性をまだ完全に失わずにいたといえれば言い過ぎになるだろうが、すくなくとも、これ以後、日本文献学の系統を引いたアカデミックな研究者によって叙述された日本近代文学史叙述の多くが、いずれも近代文学への適応性を失った形骸化した文学史叙述に墮している事実を思いおこすとき、この『明治文学史』において達成された諸成果は認められてしかるべきものである。

日本文献学が現実への生き生きとした適応性を喪失していったのは、明治末期ごろからであったが、その必然性は要約していえば、文学にたいする人間的情熱や追及に裏づけられない、実証的操作についての技術的な練達だけが文学研究の名で尊重されていたからである。したがって、ここでは学問研究が一種の技術主義におちいり、その実証的な操作は一見して合理的にみえながらも、しかし具体的に個々の作家やまたは作品についての検討や評価にあたる時、そこに文学にたいする人間的情熱や、創造過程を追体験する主体性の欠如という欠陥を露呈せざるをえないのである。このいわば文学的主体が脱落した文学喪失、人間喪失が必然的に日本文献学をうす手な「客観主義」へ追いこみ、アカデミズムの仮面をかぶった権威

主義へ赴かしめ、その現実への適応性を急速に失わしめていったことは周知の事実であろう。

そして岩城準太郎の『明治文学史』もまたこうした日本文献学の根本的な制約をうけていたといわざるをえないのである。そこであげられた文学史叙述の基礎的作業としての資料的、文献的、伝記的等の個々の領域での研究成果についてはそれに相当する意義が与えられるべきであり、『明治文学史』の日本近代文学史叙述としての先駆的意義が、官学的特権化する以前の日本文献学の文学研究の方法あるいは態度をつらぬいている合理性によって導かれたということには疑いないとしても、そこに合理性の裏返しである文学主体を喪失した「客観主義」技術主義に墮する危険な兆がまったくなかったとはいえないのである。

それはたとえば、「歴史は常に繰返す。而かも繰返しつつ進歩すと称す」といつて歴史の変化発展を「前進」「反動」の反復運動としてのみとらえ、現象の本質的究明を通して歴史の法則性をつかみ出そうとする努力を放棄した態度に端的に示されている無法則性無思想性、あるいは明治文学に関する主要な文学現象については、一応もれなく網羅しているが、しかしその叙述は羅列的で個々の作家や作品、各文学流派についての評価は常識的な域を出ず、対象にたいする主体的な追及が弱い点などあげることができらるう。これらの点はいずれも『明治文学史』のマイナス面として指摘されねばならない。結論めいたことをいえば、こうしたマイナス面は、根本的には岩城準太郎の近代文学観念の把握の不明確さ、アイマイさに起因するものであった。ことばを換えていえばそこには、近代文学にたいする主体的要求がまったく欠如しているのである。

三

『明治文学史』における近代文学にたいする主体的要求の欠如または近代的文学観念の把握のアイマイさは、根本的には日本文献学の近代前的な本質の反映であったことはいうまでもない。この点については、さらに『明治文学史』の内容に立入った具体的な検討が必要であろう。しかしこのばあい、個々の作家・作品にくだされていく評価を一つひとつ検討してゆくのは煩わしいから避けて『浮雲』評価を中心にした二三の問題にしほりたい。

日本近代文学史叙述の研究において、まず『浮雲』の文学史的位置づけや評価がそこでどのようになされていくかに検討をくわえることがどうしても避けてとおることのできぬ問題であることは、『浮雲』の成立が厳密な意味で日本近代文学の出発点であり、したがって『浮雲』はその後の日本近代文学のさまざまな展開と深くかわりあっているからである。このことからして『浮雲』評価がそれ以後の日本近代文学の発展やひろがりについての個別的な評価または全体的な評価と切離しえぬほど密接にかかわりあっていることは自明のことであろう。

「実に『浮雲』は『書生氣質』を過度の橋梁として新時代に入りし小説界最初の創作なりき。思ふに『小説神髓』の所説を最も忠実に体認して、純粹なる新時代模写小説の範となりしは『書生氣質』に非ずして『浮雲』なり」

「此の作は(中略)破天荒の小説といふべし。加ふるに性格描写の技倆の卓逸なる、お勢の人物が殆ど彫り浮められたらんが如く躍動するあり。且其は全然当代人物の代表と見るべき一新性格にして、

一八九年の比、皮相文明の光に眩惑して自覚なく省察なく、徬々として新奇を追へる一代民衆の陋態は遺憾なく此の性格に現われたり。思ふに『浮雲』亦一個諷刺の作、お勢をして新思想を代表せしめ、お政をして旧思想を代表せしめ、以て新旧文明の衝突を描かんと擬す。(中略)げに二十年頃の明治文明の描写としての此の篇の価値は、之をして舊に歴史上に重きをなさしむるのみならず、文学其の物の中に於ても軽視すべからざる地位を占む」

これは『明治文学史』の『浮雲』評価の中心的部分であるが、むろんこうした『浮雲』の主題のとらえ方がこんにちからみて正しいとはいえない。新旧両文明(思想)の衝突を描いて明治社会の皮相文明を諷刺したところにこの『浮雲』の主題がある、という岩城準太郎の評価は、お勢を『浮雲』の主人公としてとらえたことに起因しているのである。「勢子に至りては、作者が明治小説壇に提出せし一新性格にして、単純放恣軽燥開豁、事となく物となく、新奇より新奇に移り行き、嘗て操守あることなし。(中略)要するに未だ覚醒せざる初心浮誇の一少女にして、一切の行為の因て来る心理の変化は総べて此の性格より起る。而して此の性格こそ内海をして懊惱せしめ憤懣せしめ、従つて『浮雲』一篇を成立せしめし所以の者なれ」このようにお勢を中心にするかと思われるが、あるいは岩城の評価もその妥当性をもつことになるかもしれないが、また『浮雲』のなかにこのような理解を生むような要素が存在していたことも否定しがたいが、しかし内海文三という形象をほとんど無視するがごとくあつかっているこの評価は本質からはずれているといわざるをえないのである。つまり文三という明治社会の下でくわえられるさまざまな非人間的な重圧に苦しみ、ためらい、悩む下積みを知

識人の形象化についてやした二葉亭の作家的エネルギーや、そこにこめられている近代的人間の立場にたった現実批判の鋭さなどにはまへたく触れられてはいないのである。二葉亭が『浮雲』のなかで描き出したところの近代的人間としての要求とその挫折の苦悩と憤りといったものは理解されていないのである。

むろん当時においては、こういう岩城のような『浮雲』評価が一般的であった。いや、戦前までこういう評価はかなり有力であつて、とくにアカデミックな研究者になる日本近代文学史叙述では、ほとんど無批判的にこの岩城の評価が踏襲されているばあいさえある——たとえば久松潜一『明治文学史序説』昭和七年刊——。前出の高橋淡水の『時代文学史』でも岩城と同じように『浮雲』はお勢とお政によって代表される新旧両思想の衝突というふうにとらえられており、また明治四十二年二月に刊行された『文芸史』（『太陽』臨時増刊号、これは明治元年より四十一年までの明治文学のうごきを各ジャンル別に詳細に叙述したものである）でも『浮雲』は『小説神髓』の実践作であつて「新旧思想の衝突の間に犠牲となつた真面目な人物が点出されて」おり、二葉亭はそこで人生問題と芸術とを結合せしめようと試みたのであると評価されている。

このような評価と異つた観点にたった『浮雲』評価を提出した文学史叙述が同じ四十二年に出ているのでここで簡単に紹介しておきたい。それは相馬御風らによつて執筆された『日本現代文学』（『文芸百科全書』早稲田文学社編）である。これは自然主義的文学史観による明治文学史のきわめて詳細な叙述として意義をもつものである。『浮雲』は「ロシア文学から影響をうけ深刻なる人生批判」の作品であつて、とくに強調されているのは、『浮雲』における「深

刻なる人生批判」と心理の解剖と客観描写とが後の自然主義文学運動と深く関連しているという点である。こういうところに自然主義的文学史観の特色が発揮されているといえるだろう。ついでにいえば、『小説神髓』についての「その心理の解剖と客観描写という二点は写実主義ばかりではなく実に自然主義の二大綱目である」という評価、あるいは一葉を「一葉は其の作品に於て後年自然派の人生観照の文芸を予言したのではあるまいか」と評価しているところなど、この文学史叙述の基本的性格が遺憾なくあらわれており、あきらかに岩城準太郎の『明治文学史』などそれ以前の近代文学史叙述とは近代的文学観念や問題把握や作品評価などにおいて根本的な相違がみられ、その後あいついで刊行された『明治文学の概観』（『山花袋ら執筆「文章世界」大正元年）『明治文学講座』（相馬御風「文章講座」大正三年）『明治小説内容発達史』（田山花袋）『明治小説文章変遷史』（徳田秋声、共到大正六年）『近代の小説』（田山花袋大正十二年）などとあわせて検討をくわえられるべきである。『日本現代文学』においては自然主義文学理論に立脚したところの創造的な主体の要求にもとずいた明治文学にたいする追及がおこなわれており、その意味では『明治文学史』のような研究者の手になる文学史叙述にはみられぬ対象にたいする主体的な肉迫があるといえようと思う。むろん自然主義者たちによる日本近代文学史叙述の積極面と限界については厳密な検討を必要とするが、そこでは彼らなりに近代的文学観念の明確な把握がなされており、また近代文学にたいする烈しい要求もつらぬかれており、作品評価でもたんなる解釈だけでとどまらず、分析的であり、創造過程を追体験してゆく文学的主体の確立がなされていたことは一応認めてもさしつか

えあるまい。

ところが岩城準太郎の作品評価は、『浮雲』のばあいですてに明らかかなように作品を主体的に追体験し、そのなかで作家の創造過程を意識的に追及し究明してゆくという文学主体をもった作品分析とはかけはなれた平面的な解釈や常識的な鑑賞の域にとどまっているのである。『明治文学史』でなされている作品評価は、一種の最大公約的な評価であるといえよう。文学にたいする主体的要求の喪失は主体と対象との分裂を生み、いかに対象を客観的な実証的操作でもって巧みに処理しようとも、所詮そこからは主体性の失われた作品評価しか導き出されてこないのである。『浮雲』を新旧両文明(思想)の衝突の作品としてとらえ、そこにある近代的な欲求をまったく見落した岩城が、それ以後の叙述のなかでいくつかの歪みをおかしたのはきわめて当然であった。

そのいい例が北村透谷の評価である。明治二十年代における透谷を中心とする若い世代の新しい近代的人間性の欲求に根ざした「文学界」のグループの文学運動についての正しい評価が、このような二葉亭評価から生れてくるはずはなかった。『蓬萊曲』に触れながら「思ふに斯かる人生問題の煩悶を懐く者、啻に透谷一人のみに非ず。所謂世紀末の思想界、往々かゝる神経質的煩悶を湛ふ。特に当代青年の一部に於て、泰西哲学思想の伝播と、其の文学思潮の浸潤との結果、従来実利の一方に偏倚せる国民の間に到底見るを得ざりし、一種悲痛の観念を養成したりき」と述べているが、透谷ら若い世代の苦悩をこのようなかたちでしかとらえることができなかつたのである。また「『文学界』は人生問題の煩悶に関する幾多の言説述作を載せ、所謂世紀末の一種の思潮既に此の間にほの見えたりし

なり。北村透谷が世を破り世を壊ち、一切の伝習を滅絶して新生の新光に浴せんと努力せしが如きは、正に斯界先覚の声と言ふべく……」といって透谷ら「文学界」の動向を世紀末の思想あるいはその萌芽のようなものとしてとらえているが、これは後の自然主義文学運動についての叙述とも関連があるのである。というのは、後述のように岩城準太郎は、自然主義文学を世紀末的思想、デカダンの傾向のきわめてつよいものとして把握しており、したがって透谷ら「文学界」の文学的動向のなかに世紀末的思想の萌芽があるとして、そういう意味で透谷ら「文学界」を自然主義文学運動に先だつものとして意義づけまた評価しているのである。むしろ透谷ら「文学界」のグループの活動をこのように世紀末的思想としてとらえることが正しいとはいえず、自然主義文学とのつながりもこのようにとらえ方で充分といえないことはいうまでもない。こうした透谷ら「文学界」についての評価の歪みは、『浮雲』の評価のアイマイとつながっており、さらにつぎの自然主義文学運動の評価にもおよんでいるのである。

「第四期の文学」として二章にわたっている自然主義文学に関する叙述は、その由来から説きおこし、その特色をあげ、個々の作家の作品を詳細に網羅し、『明治文学史』のなかでもかなり力のこもつた叙述となっていて、自然主義文学の興隆の基盤を「従来の思想が多く他人本位にして。君父国家を中心とせるに反し、言動総べて自己を本位にし、自我の發展を求めて屢々旧道徳を破らんとす」る「個人的自覚」「個人の覚醒」にあるとして、そうした自我のめざめに根ざした文学は、従来の文学が「理想を恋ふて得られざる現実の苦痛を描」いていたのに反し、「伝統の理想を抛つて現実の真に就」

こうとし、また「今の文学は作者が直接経験せる人生の一片を赤裸々に表白する者にて、作者と作物、事実と文学、二者の間分つべからざる密接の關係を有」するものであり、さらにそこでは「自然人事と自己との渾融合体せる者を全人生として取扱ふ」ために「自己暴露の文学となり、問題提供の文学となり、無解決の文学となり、無脚色の文学となり（中略）其の技巧に就て見ても、或は露骨なる描写と言ひ、或は無飾芸術と言ひ、何れも誇張を避け粉飾を去り、曲げず偽らざる事象を平淡達意の文辭に寓せ、白描素写、直ちに事実の裸体的表現をなさんとす」等々と一応妥当な見解が述べられているといえるのであるが、しかしこうした自然主義文学の特色の列挙は現象の平面的な分類にすぎず、自然主義文学者たちの自我の覚醒を指摘しながらも、その近代的自我確立へのやみがたい欲求や衝動が明治社会のきびしい現実の下でどのような抑圧をうけ障礙にぶつからねばならなかったか、またそれにたいして彼らはどのような闘い、どれほどのエネルギーをついやしたのか、そしてどこで挫折したのか、といった点についての立入った検討や批判的追及はなされていないのである。花袋、藤村、青果、白鳥らの諸作品についても、「顧みて既出作品を通覧すれば、偽らざる真実の描写と称する中にも、特に廢類哀愁の一面に馳せ、獸性解放の一角に赴き、デカダン人物の一方にのみ行くの觀あり」と述べているのも、たしかにそうした面はあるとしても、そこには自然主義者の近代的自我への激しい衝動にたいする正しい理解があるとはいいたい。

「所謂深刻小説悲慘小説の行はれしは、洋々たる戦勝の歡樂の中、既に急激なる文明の進歩に伴ふ夥多の犠牲者を出したる当時の社会状態の反映なりしが、今や我が文明の偏奇的進歩、往日の比に非

ず、覚醒の眼に映ずる社会の現状は疾痛すべき事象に満ち、生活の実況は哀傷すべき葛藤に充てり、生の圧迫は個人をして自覚せしめ、習俗を打破せしめ、赤裸々の態度を以て人生に向はしむ。此の時に方り、眼前に曝露し来る現実の真相を見ん者、悲哀痛苦の声を放たらざんと放するも能はざるなり。特に新生を翹望して一切の因襲を破らんとする時、事の容易ならざるを知り或は旧習を破るも之に代るべき新人生の容易に実現し難きを見ては、誰か不安煩悶の声を揚げざらん。（中略）而も個人は過去人物（引用者註透谷）の如く遁世自殺を学ぶ能はず、飽くまで世に生きんとする願あり。茲に悲哀起りデカダン傾向生ず」この叙述には自然主義文学者たちの自我のめざめとその苦悶苦惱についての一応すじの通った適切な理解がなされており、そのかぎりではうなずけるとしても、だがそこから直ちに「デカダン傾向」云々といってしまうところに岩城の把握の限界とでもいふべきものを感じるのである。

また、同じようなことは二葉亭の『其面影』『平凡』についてのつぎのような評価のなかにも指摘できるのである。「『其面影』『平凡』の如き、若し類を以て別つべくんば、寧ろ俳諧派の作品に近き所あり。試みに其の人生觀照の態度を見るに、人生を洞察して一般の高所より瞰下し、即ち所謂非情熱的態度、大人对小兒的態度、余裕ある態度なり」こうした評価が生れてくるのは、『浮雲』を新旧両思想の衝突としてとらえた歪みと決して無關係ではないと思われる。それは根本において共通しているのである。

『明治文学史』における個々の作家・作品についての評価や問題把握は、一面において一応その合理性と妥当性（むろん常識的であり解釈学的ではあるが）認められるのであるが、しかし二葉亭・透谷

などをはじめとする日本近代文学が日本近代のインテリゲンチヤおよび民衆の深部にめざめはじめた近代的な人間的な諸要求にインスパイヤされ、また逆にそれを刺激し引き出して困難な条件のなかで近代的な自我の自覚とその確立をめざしてつきすすんできたということをも岩城準太郎は充分に把握することができなかったのである。そしてそれ故に、『明治文学史』は日本近代文学のうち深く含まれてゐる根深い諸問題をえぐり出しそれを打開してゆく可能性を求めるといふ近代文学史叙述となりえなかつたのであるが、だからといってそこでなされた達成をしりぞけることは許されないであらう。その近代的文学観念の把握のアイマイさ、近代文学への主体的要求の欠如、あるいは作品評価の常識性などいくつかのマイナス面をあげ

ることができるとしても、そこに示された合理的な側面は、たとえそれが実証的操作の技術化へおちいる危険性があるとしても、やはり評価されなければならない。その後の近代文学史叙述にこの『明治文学史』が与えた影響は、とくに文献的、資料的、伝記的な個々の領域における研究、または時代区分や叙述の形式など決して少くないのである。この点については、この後の近代文学史叙述の個別的な検討のなかで明らかにしていきたいと思う。(本学大学院学生)

後記

この「日本近代文学史叙述の研究」の第二回として、「日本現代文学」(相馬御風ら執筆、明治四十二年)「近代文芸史論」高須梅溪(大正十年)を取上げる予定である。

プロレタリア芸術運動理論の動向

——「芸術大衆化論争」・「芸術的価値論争」および蔵原惟人の理論構造をめぐって

転向文学研究会

「意味の歴史的転化」ということばがある。一九二九年十一月『プロレタリア芸術教程』第二輯(世界社)に、芸術的価値論争の一環として『芸術的価値と政治的価値』をかいた三木清は、これにおいて、「意味の歴史的転化の原則」によって芸術の芸術的価値と政治的価値をときあかした。すなわち三木清は、芸術は政治的価値のみ

でなく、道徳的価値、宗教的価値、そのほかあらゆるイデオロギー諸形態としての価値をもちうるとして、それらの関係を歴史的にあきらかにしたのち、それにもかかわらず、なぜいままさに政治的価値が問題になるのか、と問題を提出して、マルクシズムと政治との関係を考察し、「マルクス主義の文学にとつても政治は附加的な若